中友会だより
[発行所]
中友会
港区西新橋1-22-13
全日本中学校長会館202号室
東京都中学校長会事務局内
TEL 03-3504-8705
FAX 03-3504-8706

会則第２条
親睦
互助
生涯学習

http://chuyu-kai.org/

過密

中友会副会長　須永　一男

かつて、マウスを飼育していたことがある。実験用なので清潔な環境で健康に育てなければならない。ケージの中の糞尿を清掃し、敷き藁を取り替え、飼料と水を補給するのが毎日の作業である。大変清潔好きな動物で寝場所には糞尿一つない。敷き藁を総がかりで噛み砕き綿のようにする。そこにフグの刺身のように丸く並び、さらに噛み砕いた敷き藁を布団のように掛けて眠る。全個体が仲良くこれらの作業をする。ところがケージが不足した時など一時的に多くの個体を収容することがある。すると集団に異変が起こる。ケージの中が殺気立ち、仲間に噛みついたり餌を奪い合うようになる。寝場所も仲間を威嚇して確保しなければならない。過密はこれ程まで集団に影響するのである。

私たちの社会にも似たような現象があるように思う。通勤時の乗り物は他人を押さなければ乗れない。階段や通路も遠慮していては進めない。商品やチケットを手に入れるために他人を押しのける。

高度経済成長の頃からだろうか、私たちはもうずいぶん長い間このような生活をしているように思う。遠慮していては生活できないから先を争う。道を横切るのに一歩でも他人の前に出ようとする。多忙な日常である。理解できないわけではないが、怖いのはこのような生活に慣れてしまうことである。謙譲や思い遣りといった心が忘れ去られてしまうことである。痛ましい事件や事故もこのようなことに起因するものが多いようにも感じる。

先日、四十歳前後の会社員らしい三人連れと電車に乗り合わせた。会話からどうやら先輩後輩の間柄らしい。窓の外をぼんやり眺めていると、突然「殺しますよ、本当に。」という言葉が聞こえてきた。耳を疑ったが確かに聞こえた。彼らは笑いながら話をしている。どうやら先輩の冗談に後輩が返した言葉らしい。近頃、子供たちが「死ね」「殺す」と悪態をつく。何の疑問ももたず日常会話の中で平然と使っている。ゲーム感覚なのか、子供たちの言葉の乱れとばかり思っていたが、この世代の人の口からでたことに驚きを隠せない。冗談でも使って欲しくない言葉である。また、これらの言葉がメールなどで文字になると事態はさらに深刻である。子供たちの間では、そのことが原因でトラブルになることがある。いじめや不登校の引鉄になることも多い。

かつては他人の前を横切ることは遠慮した。一歩待ってから進んだ。やむを得ず前を横切らなければならない時には「失礼します。」と声をかけた。「失礼」つまり「礼はわきまえているけれど今回だけはご容赦願いたい」ということだと思う。最近では聞かなくなった。「失礼」もそれが日常的になると礼は廃れてしまう。「無礼」な社会になってしまう。

かつて、まだまだゆとりのあった頃の、近所の大人たちの会話を思い起こす。「今年は暑いね。」と声をかけられ、「コメが豊作で農家は助かるだろう。」と返す。「今日は寒いね。」には「外で働く人は大変だ。」である。いつも他人への想いがあったように感じる。

江戸しぐさという言葉があるそうである。江戸商人の行動哲学だそうだ。例えば雨の日に互いの傘を外側に傾けてすれ違う「傘かしげ」。道の真ん中を歩かず七割は他人のためにあけて歩く「七三の道」。断りなく訪問したり、約束の時間を守らずに相手の時間を奪うのは重い罪という「時泥棒」。非喫煙者のいるところでは喫煙しない「喫煙しぐさ」。でも、しかし、と逆らわず年長者の言葉に従うことが人間の成長につながるという「逆らいしぐさ」。などなど。現代社会でも通用させたいものではないか。

過密の解消はすぐには難しいとしても、心の持ち方は改善できる。「失礼」の一言で雰囲気は和む。車内では身体の向きを少し変えるだけで互いに乗り心地が良くなる。少しでも周囲にゆとりが生まれるような言動に心掛けたいものである。